

る可能性が高く、一般的に考えた場合情報価値が低いということが言えるのではないだろうか。我々の日常生活で考えてみても、スポーツジムやレストランに関しては、「何時から何時までの営業で定休日は何曜日」という情報を常に意識し、また他の人と共有しているが、学校・工場といった特定の関係者のみに関わる場所に関してはそういう情報にそもそも興味を持たないのである。このように、ある事柄に対する人々の関心の度合いの違いがコーパスデータに頻度として反映されているというのは、当然なことかもしれないが、非常に興味深いものである。

5.3.4 まとめ

以上、使役交替が見られた事柄表現に関して、頻度的観点から見て、〈使役的表現〉の割合が高い場合と、〈非使役的表現〉の割合が高い場合、そして両者の割合に大きな差がない場合について述べた。

簡単にまとめると、前者は、行為性が強いもの、あるいは事柄の特性上「原因」が意識されやすいものであり、後者は、自然現象あるいはそれに近い性質の事柄、言い換えると人が直接的に引き起こすことのできないようなものである、という意味特性が見出された。そういう意味でそれぞれは、5.2 に示した〈使役的表現〉のみの場合や〈非使役的表現〉のみの場合と意味的関連性が認められる。重要なのは、使役交替が可能な事柄表現においても、〈使役的表現〉と〈非使役的表現〉の実際の使用頻度には偏りがあるということである。

ただし、5.2 と 5.3 に示した事柄表現は、あくまでも今回扱ったコーパスデータの中で使役交替が見られたか否かによる分類に過ぎず、この分類結果は柔軟に捉える必要がある。すなわち、5.2 に示した事柄表現の場合も、使役交替の関係でそれぞれに対応する表現が存在しないとは言い切れず、また逆に、使役交替が見られた事柄として 5.3 に示したものには、たまたま見られた例外的表現が含まれている可能性があるのである。

なお、〈非使役的表現〉が優勢なコロケーションにおいて見られた〈使役的表現〉は、主語の意味特性（自然現象を表す原因格の主語）、主語と目的語との間の意味関係（比喩的表現を形成する「部分・全体」の関係）に注目することで、通常の使用構文とは意味的に区別されることが確かめられた。

5.4 本章のまとめ

この章では、コーパスから収集した 22 動詞の各 100 事例（第 1 次データ；2182 例）及び、「名詞+動詞」の 144 コロケーションの各 10~30 事例（第 2 次データ；2882 例）に基づき、結合語句（〈他目〉と〈自主〉・〈再主〉）に注目しつつ、使役交替動詞の言語運用上の用いられ方を観察した。

その中で、使役交替における〈使役的表現〉と〈非使役的表現〉の対応には、結合名詞の意味内容が密接に関わっていることが明らかになった。すなわち、動詞それ自体は使役的用法と非使役的用法を兼ね備えているものでも、個々の名詞と結びつきコロケーションを形成する際には、両者の対応関係に制限が生じたり、割合的に差が生じたりするのである。

具体的に述べると、調査対象となった 144 のコロケーションのうち、〈使役的表現〉のみ見られたものが 63 コロケーション (【資料 11】)、〈非使役的表現〉のみ見られたものが 35 コロケーション (【資料 12】)、使役交替が観察されたのは 46 コロケーション (【資料 13】) であった。

まず、〈使役的表現〉のみ見られる場合は、その事柄的意味特性において、《絶対他動詞》との間に意味的共通性が認められることが確かめられた。すなわち両者はいずれも、当該の状態変化において「使役主としての人」が含意されるか、あるいは当該の状態変化の「原因」が表現される傾向があるのである。

次に、〈非使役的表現〉のみ見られる場合は、その事柄的意味特性において、《絶対自動詞》との間に意味的共通性が認められることが確かめられた。すなわち両者はいずれも、自然現象的事柄あるいは人間が直接引き起こすことのできないような事柄を表すのである。

このような意味特性が、《絶対他動詞》《絶対自動詞》の場合は、語彙レベルにおいて含意されているのに対し、使役交替動詞の〈使役的表現〉のみの場合や〈非使役的表現〉のみの場合は、結合名詞を含む事柄レベルにおいて含意されるということである。

使役交替が観察されたものに関しては、各動詞の 100 事例の中ですでに使役交替が確認された 57 コロケーション (【資料 10】) と合わせて合計 103 コロケーションのうち、10 例以上の事例がある 55 コロケーションを対象に、〈使役的表現〉と〈非使役的表現〉の割合を調査した。

その結果、〈使役的表現〉の割合が高い (70%以上) のものが 29 コロケーション、〈非使役的表現〉の割合が高い (70%以上) のものが 20 コロケーションで、両者の割合に大きな差が見られないのは 6 コロケーションのみという結果が得られた (【資料 14】)。

作例などのミニマルペアで示される項交替を見る限りでは、使役交替における〈使役的表現〉と〈非使役的表現〉は、単純に使役主の有無という点で対応しているようにしか見えないかもしれない。しかし、実際の言語運用上の頻度的観点からすれば、両者における「使役主の着脱」——つまり、〈使役的表現〉から使役主を取り除いたり、〈非使役的表現〉に使役主を付け加えたりする操作——はそれほど自由に行われていないということが

わかる。

すなわち、実際の言語使用において使役交替動詞は、結合名詞を含む事柄的意味特性によって、〈使役的表現〉と〈非使役的表現〉に用いられる頻度に偏りが観察されるのである。言い換えると、ある「名詞+動詞」の組み合わせによって表される事柄は、その意味特性に基づいた一定の認識パターン（使役的あるいは非使役的）で捉えられている（あるいはその傾向がある）ということである。